

大石寺の観光地化を阻止するために始まった登山会(1)

法主の住まいはバラック、所化の素人芝居で人集め

戦後間もない頃の宗門がどんな状態にあったか、また、どのような経緯をたどって登山会が始まり、今日の宗門があるのか。戦後の生き証人であった渡辺慈濟住職の証言を掲載する。

渡辺慈濟住職の証言

●法主の住まいはバラック

私が得度したのは、昭和十四年。当時の本山は、今日からは想像もできないほど困窮しており、貧乏寺そのものだった。

昭和二十年六月十七日に起きた大石寺の火災で、大奥、書院、客殿等を焼失。約六百坪がポツカリ焼け落ちてしまった。それに追い打ちをかけるように戦後の農地改革の波である。大石寺の土地は、戦前三十一万八千坪あったものが、わずか五万一千坪になった。六分の一に激減である。

昭和二十三年十一月に客殿は再建されたが、御影堂は雨漏りがし、五重塔はさらに状

態がひどく、雨が降り込んでくるほど傷んでいた。当時の日昇上人の住まいも、バラックというありさまだった。

●食糧を確保するために所化が土地を開墾

大坊でも、今の客殿前の広場となっていているところに、わずかばかりの田んぼが残った。しかし、耕すにも近くの農家は馬を貸してくれず、道具だけ借りて、当時の所化七人が馬代わりになって働いた。近所の檀家の人々は「七頭だて！」と笑って見ているだけで、手伝ってはくれない。お仲居まで加わり、皆泥だらけになっての作業だった。先の見通しも明るさもなく、苦勞と貧乏の時代だった。

●「総本山法華講」を発足しても誰も足を運ばない

檀家はというと、自分たちの生活が手一杯で、大石寺のことを考えるどころではなく、

本山からすっかり遠ざかっていた。檀家を、どうやって大石寺に参詣させるか。さまざまに議論、検討された。そこで浮上したのが、「総本山法華講」を発足させることであった。昭和二十五年、大聖人御聖誕の意義を刻む二月十六日に、御誕生会を兼ねて発足式を行った。

八月のお盆と、二月の誕生会の時に総会を持ったが、檀家の人たちは足を運ばない。一つの対策として、浪花節語りとか漫才師などを呼んで、「客寄せ」に使った。しかし、これはお金のかかることでもあり、自前の芝居を打つことになった。この出演者に、我々所化小僧も駆り出されることになったのである。

●所化の素人芝居で客集め。五百人がやっと集まる

二十五年八月のお盆の時の集まりでは、「佐渡の御難」という題で劇を行った。この時、客殿には、法要の

時に集まったのは二百八十人ほどだったが、劇の時には五百人に膨れ上がった。芝居の客寄せ効果はあったわけだが、手を替え品を替え、懸命になって集めても、五百人集まるのが精一杯の寂れた田舎の貧乏寺だったのである。

●大石寺の観光地化が浮上

そうしたなかで、大石寺復興の目玉として計画されたのが観光地化であった。二十五年十一月のことである。背に腹は替えられぬとはいうものの、明らかに間違った選択だった。信心もしない人を大石寺に参詣させて、その人たちが落とす金を狙うことは、謗法の布施を禁じた宗旨に違背することは明白であった。これでは、京都や奈良の他宗寺院と何ら変わらなくなる。この誤った道に堕ちるところを、辛うじて踏み止まらせてくれたのが、学会の戸田先生であった。(続く)